

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32672

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10520

研究課題名(和文) 在日外国人結核患者の療養支援マニュアルの作成

研究課題名(英文) Creating a Support Manual for Tuberculosis Patients among Nepalese Residents in Japan

研究代表者

金田 英子 (KANEDA, EIKO)

日本体育大学・スポーツ文化学部・教授

研究者番号：10253626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：結核に感染し入院治療を必要とする在日ネパール人へのインタビューを通じて明らかにされた課題をもとに、『DOTSってなあに?』のネパール語版を作成した。保健所の役割を中心に、結核治療の具体的な手順を解説している。療養支援のマニュアル的要素も含まれている。さらに、挿絵に関しては、現地の高校で絵画コンテストを開催し、現地の高校生に対しても、結核の啓発教育に寄与した。また研究を進める中で、日本語には存在するがネパール語には存在しない医療専門用語が多く、患者との意思疎通を阻害していることが判明した。これを受けて、試験的に『HUMAN ANATOMY：人体の構造』の日本語-ネパール語-英語版を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本での結核発生届の特徴は、高齢者層と20代の若者の2層化が顕著になりつつあり、その若者の年代の多くが、在日外国人で占めている。とりわけ結核の蔓延国であるネパールからの在住者数は国内第4位で、言葉の問題もあり、この日本特有の結核対策についての社会制度を理解することが難しい。今回作成した冊子は、そのような課題解決のための第一歩になるであろう。また、同時に作成した「Human Anatomy:人体の構造」も、ここまで専門性を追究したネパール語版はないと言っても過言ではない。これは日本初の試みであり、医療関係者や在日ネパール人のための実践的教本としての活用が期待される。

研究成果の概要(英文)：In this study, based on the issues identified through interviews with Nepalese residents in Japan who were infected with tuberculosis and required hospitalization, we created a Nepalese version of "What is DOTS?". This booklet explains the full scope of tuberculosis treatment in Japan, focusing on the role of public health centers, using animations, and includes elements of a support manual. Furthermore, it became evident that many medical terms exist in Japanese that do not exist in Nepalese, hindering communication with patients. Therefore, we created a Japanese-Nepalese-English version of "HUMAN ANATOMY: The Structure of the Human Body" on a trial basis. This is the first attempt of its kind in Japan, and it is expected to be used as a practical textbook for medical professionals and Nepalese residents in Japan.

研究分野：国際保健学

キーワード：結核 在日外国人 ネパール 医療通訳

研究課題：在日外国人結核患者の療養支援マニュアルの作成

研究代表者：金田英子（日本体育大学）

## 1. 研究開始当初の背景

ここ数年、途上国からの在日外国人結核患者が急増しており、それに伴い医療現場でのトラブルも多数報告されている。このような背景から、医療通訳の必要性については一定の理解が進み、先行研究でも通訳の重要性が広く認識されるようになってきた。しかしながら、医療通訳者自身が遭遇する、通訳時における両国間の「医療格差」（文化的介入）の問題については十分に追究されていない。この「医療格差の問題」とは、患者である外国人と医療従事者である日本人との間に通訳者が立ったときに直面する、言語の直訳では伝えきれない文化的差異を意味する。

東京 2020 オリンピック競技大会に向けて、ますます多くの外国人の訪日が見込まれていた中で、医療通訳者の人数を確保するだけでなく、異文化理解を重視した治療の提供が、患者の QOL（生活の質）に直結する重要な課題として認識されていた。しかし、実際には新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生し、インバウンド観光客の減少や、ビザの発行停止、さらには航空機での移動制限などにより在日外国人の数が著しく減少するなどの影響が出た。

本研究課題は 2019 年から 4 年間の計画で開始されたが、2020 年 2 月の大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号での新型コロナウイルスの集団感染の発生以降、日本もコロナ禍の影響を大きく受けることとなった。新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、医療機関や保健所は対応に追われ、結核の発見が遅れる事態も発生した。とくに、日本語の理解が不十分な在日外国人は、医療機関での受診を拒まれるケースが増え、結果として重症化する問題も生じていた。このような困難な状況下において、結果的に 1 年間の延長を余技なくされた。

## 2. 研究の目的

本研究では、在日外国人の中でも、とくに罹患率の高いネパール人結核患者を調査対象とした。医療現場での通訳を担当する医療通訳者によるインタビュー調査を通じて、ネパール人結核患者が直面する医療格差の諸問題を具体的に明らかにする。これにより、ネパール人結核患者が治療の途中で服薬を中断することなく、確実に日本での治療を完了できるよう、療養支援に関する冊子を作成することが主要な目的であった。具体的には、医療通訳者から収集された医療現場でのデータを基に、ネパール人結核患者が抱える文化的、社会的、言語的な障壁を分析し、それらを克服するための具体的な支援方法を検討した。このマニュアル的要素を含む冊子は、医療現場および医療従事者による使用を想定し、実践的かつ具体的な内容を含むものとした。医療従事者がネパール人患者とのコミュニケーションを円滑に行

い、患者が治療に対して高いモチベーションを維持できるよう支援することを目指した。

[注記]

本研究課題では、“マニュアルの作成”としているが、最終的には、“マニュアル”と言うよりも“冊子”と言うほうが適切ではないかと判断された。ゆえに報告書内においては、“冊子”という言葉で統一をすることとした。

### 3. 研究の方法

初年度（2019 年度）：研究倫理委員会を通じて研究準備を進めた。研究の実施に必要な倫理的承認を得るために、研究計画書や対象者への説明文書などを整備し、審査を受け承認を得た。

2020 年 3 月頃からのパンデミック発生：日本国内でも新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起り、予定どおりに患者へのインタビューが進行できなかった。そのため、この期間中に療養支援に関する冊子の内容についての検討を行った。とくに、保健所の役割や服薬支援に関する項目に着目し、他の資料を基に議論を重ね、まずは冊子のネパール語への翻訳に着手した。

2021 年 3 月から 10 月：東京都内の F 病院の結核隔離病棟にて、ネパール人 5 名に対して半構造式インタビューを研究共同者と共に実施した（表 1）。インタビューの内容を詳細に記録し、その後、文字化して分析を行った。これにより、在日ネパール人の結核に関する諸問題を明らかにした。

冊子の作成：インタビューを通じて明らかになった課題を反映させた冊子の作成に取り組んだ。すなわち、日本語版の『DOTS ってなあに？』をネパール語に翻訳し、その中に、先のインタビューの分析で明らかになったことも取入れ、ネパール人向けにネパール語版を作成した。

さらに、ネパール語版の『HUMAN ANATOMY：人体の構造』も作成した。これらは保健所や病院などで使用することを想定し、実践的かつ具体的な内容を含むものとした。

絵画コンテストの実施：2023 年、ネパールのカトマンズ大学高校の高校生を対象に、結核に関する絵画コンテストを開催し、応募した生徒の作品をマニュアルの挿絵として使用し

表 1. インタビューの内容

[別紙①]	
番号	インタビュー項目
1	通し番号
2	開始日時
3	氏名
4	出生地（ネパール）
5	最終学歴
6	母国での職歴
7	母国以外での職歴
8	日本での滞在期間（合計）
9	日本入国日（初回）
10	来日を決めたいきさつ
11	現在の滞在目的
12	日本語の学習歴
13	生活費
14	日本での親類縁者
15	アルバイトの有無
16	現在の生活パターン
17	食事（自炊・ネパール食・ネパール食以外）
18	通院（期間） 外来通院をしている今を、どのように捉えているか
19	診断までの経緯
20	自覚症状があったときにどのように考えたか
21	そのことについて、何か対応したり行動をおこしたりしたか
22	受診後、結核と診断されたとき、どのように感じたか
23	誰かに相談したか
24	相談相手の反応は、どうだったか
25	本国では、結核の診断・治療はどのように行っているか
26	ネパールと日本の医療の違いで、戸惑ったこと
27	保健所について（煩わしい、安心感が持てる）
	入院をした場合
28	学校やアルバイト先には、どのように伝えたか
29	同居者や親しい友人には、どのように伝えたか
30	伝える際に、何か配慮したことはあったか
31	入院時に印象に残っていることを3つ
32	現在、不安なこと（例：ビザ）
33	その他（備考）
34	終了時間

た。現地の教員に依頼して結核に関する啓発教育も実施し、標語も絵画の中に取り入れた。そして、それらを冊子の挿絵に使用するとともに、最後に参加生徒の標語も掲載した。

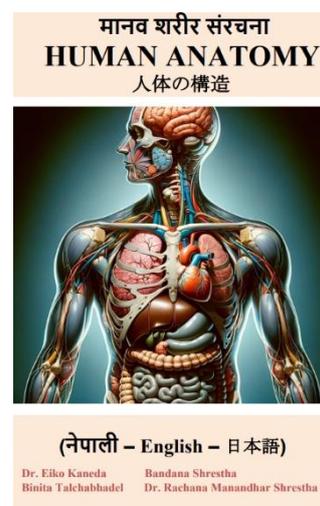
再度のインタビュー：先にインタビューの実施に参加したのうち、連絡が取れた2名に対し、2024年の治療終了後に非対面（ZOOM）にて後ろ向きインタビューを実施した。治療後に改めて感じたこと、語ることのできなかつた当時の様子などについて着目し、それまでに整理・分析してきた内容と齟齬がないかを確認した。

#### 4. 研究成果

新型コロナウイルス感染症の影響で、病棟への入室や患者との接触などの制約、ネパールへの渡航制限など様々な影響を受けた。そのため、研究期間を1年延長し、インタビューや文献を通じて明らかになった内容については、研究代表者や共同研究者がそれぞれの専門分野の学会や研究会で発表・報告を行った。例えば、最終年度（2023年度）では、研究代表者の金田は「在日ネパール人結核患者の文化・風習の違いがもたらす治療・療養中の課題」（第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会）、共同研究者の永田は「喀痰塗抹陽性肺結核外国出生患者の治療と理解の受容について」（第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会）、またバイラは「在日ネパール人結核患者の療養支援に関する研究：文化の違いが引き起こす問題を中心に」（東洋大学アジア文化研究所 第18回年次集会）などで最終発表を行った。これらの発表は、ネパール文化特有の結核に対する考え方を明らかにし、日本における医療現場での異文化理解につながった。

成果物としては、『DOTSってなあに？』（右側：21ページ）のネパール語版と『HUMAN ANATOMY：人体の構造 ネパール語—日本語—英語』（左側：40ページ）を作成した（表紙のみ掲載）。前者は保健所や病院などを中心に、服薬支援を必要としている現場への配布を行ったが、その実用性や使用状況についての追跡調査まで行えなかつたことが、今後の課題として挙げられる。また、後者については医療通訳者関係者を中心に配布した。

このように、想定外の事態が起きたものの、最終的には当初の目的を概ね果たすことができた。在日外国人結核患者の療養支援に関する冊子の作成を通じて、異文化間の医療格差を埋め、外国人患者が適切な治療を受けられる環境を整えることができた。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金田英子
2. 発表標題 在日ネパール人結核患者の文化・風習の違いがもたらす治療・療養中の課題
3. 学会等名 第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 永田容子
2. 発表標題 喀痰塗抹陽性肺結核外国出生患者の治療と理解の受容について
3. 学会等名 第98回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金田英子
2. 発表標題 ネパールにおける結核対策：学校での健康教育の視点から
3. 学会等名 日本国際保健医療学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金田英子
2. 発表標題 医療通訳の専門職化実現のための必要要件とはどのようなものか（シンポジウム）
3. 学会等名 日本国際保健医療学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Eiko KANEDA
2. 発表標題 Medical problems among Nepalese residents in Japan
3. 学会等名 1st Japan Nepal Medical Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	永田 容子 (Nagata Youko)  (30752620)	公益財団法人結核予防会 結核研究所・対策支援部 保健看護 学科・副部長  (82801)	
研究分担者	バイラ ビレンドラ (Bhaila Birendra)  (40759221)	東洋大学・アジア文化研究所・客員研究員  (32663)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------